

聖書：第二サムエル記14章1～11節

説教：仲裁する者がいなければ

1 ダビデと三男アブシャロム

1) 殺人者は必ず殺されなければならない

あるとき、ダビデの長男であるアムノンが血のつながっている妹タマルに恋をし、力づくではずかしてしまいます。ダビデの三男であるアブシャロムはタマルから事件の一部始終を聞き、その日以来兄アムノンを憎み、二年間チャンスをつかっていた末に彼を殺してしまいます。アブシャロムは報復を恐れ、遠く離れたところにあった母親の実家に逃げ込んでしまいました。それが前回までのあらすじです。

日本でも、皇族のあれやこれやがゴシップのネタとなって週刊誌を騒がします。イスラエルも同じです。まして、ダビデ王の子どもたちが争い、兄弟を殺したとなれば、国中大騒ぎでいろいろな批判や意見が出て来る。おそらくこんな意見です。「律法に何と書いてあるか。民数記には、「殺人者は必ず殺されなければならない」（民数記35章18節）とあるではないか。アブシャロムが、妹のタマルのことでアムノンに腹を立てたのはわかる。しかしだからと言って、兄アムノンを殺してよいという理由にはならない。王の世継ぎを殺したのだから、ダビデは王として、アブシャロムは死刑にすべきである。」

2) 身動きできないダビデ

この声はダビデの耳にも聞こえています。ダビデは王としてなんらかの判断をすべきです。ところが13章38節には、アブシャロムは三年の間、母親の実家に逃げていたとあ

ります。ダビデはなにもしなかった。

側近のヨアブはこのことを心配します。1節に「ツェルヤの子ヨアブは、王がアブシャロムに敵意を抱いているのに気がついた」とあります。日本語訳では「敵意」と訳してありますが、原文を見ると、「王がアブシャロムのことを気にしていた」と訳したほうが適切だろうと思います。ダビデの心の中は複雑です。長男アムノンを殺した事への怒りはあったでしょう。だから「敵意があった」というのはそうかもしれない。けれども、たとえ兄を殺したとしても、アブシャロムは自分の息子なのです。父親として息子を愛する愛情に変わりがない。怒りと愛情の狭間でダビデは身動きできなかつた。それが一つの理由です。

それだけではありません。そもそもなぜこんな事件が起きてしまったのか。元をたどれば自分がバテ・シェバを奪い、バテ・シェバの夫ウリヤを殺したことと関係があるのです。息子たちは、父ダビデの罪をそのまま繰り返しているだけなのです。ダビデにはそれがわかる。うしろめたさがあるので何もできない。そうこうしているうちに三年の月日が流れてしまいました。ダビデに対する世間の風当たりは強くなっていきます。このまま何もしなければ、ダビデが王座から引きずり落とされる可能性さえ出て来ます。

ヨアブはなんとか事態を改善していかなければと感じます。王さまに忠告しなければなりません。が、なにしろダビデの罪に関わることなので、簡単なことではない。それでどうしたか。ヨアブは自分の口で語るのでは

なく、テコアに人をやって智恵のある女性をつれてきて、この女性を通して語らせる方法をとることにします。

2 テコアの女

1) いのちをかけて

この女は、喪に服している者を装ってダビデのところに行き、王にこんなことを言います。「自分は夫をなくしました。ふたりいた息子の仲が悪く、けんかをしてひとりかもうひとりを殺してしまいました。それだけでも大変なことなのに、親族が「兄弟を殺すようなやつは生かしてはおけない。あいつを引きずり出してきて殺すべきだ」と言うのです。もしそんなことになったら、私は夫を亡くした上に、夫の名を継ぐ者も失ってしまうことになります。」

おわかりのとおりこれらはすべて作り話です。すべて演技です。ひとことで言えば王の前で嘘をついたことになる。嘘がばれればただでは済まないでしょう。悪意があるとみなされればいのちがありません。ヨアブが計画したことですからヨアブの責任も重大です。ヨアブもテコアの女も、いのちをかけです。それでも、ヨアブは自分のいのちをかけてアドバイスしなければと考えます。アブシャロムの問題は、もはやダビデ個人の問題ではありません。神の正義を取り戻す必要があります。でなければ、ひとびとは靈的に窒息してしまうのです。

2) 仲裁する者がいなかったので、殺した

テコアの女は二つのことをダビデに訴えています。まず一つ目は6節にあります。「このはしためには、ふたりの息子がいましたが、ふたりか野原でけんかをして、だれもふ

たりを仲裁する者がいなかったので、ひとりが相手を打ち殺してしまいました。」

この話がだれのことを言っているのか、私たちにはすぐにぴんと来ます。ダビデのふたりの息子、アムノンとアブシャロム、アブシャロムがアムノンを殺したことを暗に言っています。どうして兄弟どうして殺し合いになったのか、その理由も説明しています。「だれもふたりを仲裁する者がいなかった。」

タマルがはずかしめを受け、アブシャロムがアムノンを憎んでいることに最初に気がついたのはヨアブでした。このままではいつか殺し合いになるだろうと心配していました。けれどもダビデは何もしません。それどころか、アブシャロムが計画したパーティーにゴーサインを出し、その結果パーティーの席でアムノンが殺されてしまいました。こんなことになる前にダビデが何とかすべきだったのです。父親としてアムノンとアブシャロムの仲裁に入るべきでした。そのことを暗に批判しているともとれます。

3) 息子を根絶やしにしないように

この女が訴えていることの二つ目は、11節にあります。「どうか王さま。あなたの神、主に心を留め、血の復讐をする者が殺すことをくり返さず、私の息子を根絶やしにしないようにしてください。」

人々は言いました。兄殺しの犯人アブシャロムは兄は死刑にすべきである。しかし、テコアの女は訴えます。たとえ兄弟を殺した息子であっても、その息子を根絶やしにしないように、王さまから命令を出してください。

3 ダビデ

1)私の名を私の父の家から根絶やしにしないように

ダビデは女の訴えを認め、女の親族に対して息子を殺さないよう命令を出そうとします。それはよいのですが、では民数記の律法はどうなるのでしょうか。人々は民数記の律法を根拠に、アブシャロムは殺されるべきだと考えていたのです。律法を無視してよいのでしょうか。あるいは、この女がかわいそうだから、という感情的な話なのでしょうか。きちんとした聖書のみことばの裏付けがなければ、ダビデの判断は間違っていたことになります。

ダビデがこの女の訴えを認めた根拠はなにか。調べていくと実はダビデ自身がかつて自分の口で語っていました。ダビデがサウルからいのちを狙われていた頃のことです。あるとき、武器を持たず、ただひとりだけになっているサウルがダビデの目の前に現れたことがありました。ダビデの部下はこれを見て、サウルを殺そうとするのですがダビデはこれを押しとどめます。あとでサウルがこのことを知ったとき、サウルはこう言いました。『さあ、主にかけて私に誓ってくれ。私のあとの私の子孫を断たず、私の名を私の父の家から根絶やしにしないことを。』(第一サムエル 24 章 21, 22 節) これはサウル家のことですが、サウルの家ことはイスラエルの家のことでもあるのですから、テコアの女にも当てはまるとダビデは考えています。ダビデが自分で誓ったのですから、これを守る必要があります。なので、ダビデは女の訴えを取り上げた。

2) 仲裁する者がいなかった

そこで一つの矛盾が生まれます。民数記によれば殺人を犯した者は殺されなければなりません。いっぽう、ダビデはイスラエルの子孫を根絶やしにはしないと誓いました。どちらが優先するのでしょうか。もしダビデの誓いが優先するのだというのなら、その理由は何でしょうか。必ず理由があるはずですが。

テコアの女は智慧があります。この一連の問題の核心がどこにあるのかを見抜いています。「誰もふたりを仲裁する者がいなかったため、ひとりが相手を打ち殺してしまいました。」これがポイントです。アブシャロムがアムノンを殺してしまった。でも、もし仲裁する者があのときいてくれたならこんなことにはならない。アブシャロムも被害者である。そのような訴えです。仲裁者がいなかったという理由により、民数記ではなく、ダビデの誓い、すなわち息子を根絶やしにしてはならないという原則が優先されると訴えていたのです。

3)テコアの女から見えてくるキリストの恵み

この話は、私たちに大きな恵みがあることを教えています。

私たちはアブシャロムのように人は殺してこなかったかもしれませんが、けれども、心の中ではどうでしょう。人を祝福するどころかのろっていました。憎んでいました。心の中で殺していました。それはすべて罪であると言われます。民数記によれば全員死罪にあたる罪です。それなのに、私たちが殺されずに済んだのはどうしてか。

二つの理由がありました。一つ目。あなたが誰かを憎んでいたとき、あなたには仲裁する者が必要だった。けれども仲裁者がいな

かった。二つ目の理由。あなたの父の名を継ぐ者はあなたしかいない。だから私たちは殺されてはならない。そういう原則があるから。

では、いま私たちの仲裁者はいるのでしょうか。かつてはいませんでした。しかし今はいます。私たちの主イエス・キリストです。この方は、テコアの女と同じように、父なるか神の前にひれ伏し、いのちをかけて訴えてくださり、私たちを殺さないようにとりなしてくださいました。

それはよい。では神の正義はどこに行ったのですか。人を殺したと言う罪はどうなるのか。神の正義は曲げられたのでしょうか。兄アムノンを殺したアブシャロムは罪の制裁を受けなくてもよいと言うのでしょうか。それではあまりにも不公平だと思いませんか。もちろん、このまま何もしないというのならそのとおりです。

神は不公平ではなく、公平な方です。神は必ず罪をさばきます。神ご自身が私たちの罪の身代わりとなり、代償を払って神の正義を取り戻そうとされました。神の正義を回復させるためにご自分のいのちを捨ててくださいました。

テコアの女の姿とことばから、主の十字架が浮かび上がって参ります。